

令和 元 年 6 月 19 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02705

研究課題名（和文）英日翻訳における翻訳等価性の研究

研究課題名（英文）Research on Translation Equivalence between English and Japanese

研究代表者

河原 清志（Kawahara, Kiyoshi）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：70511517

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語・日本語の翻訳における原文と日本語の等価（原文と訳文が同じ意味であること）について言語学的に解明し、その成果を、英日語を比較対照する言語学研究の観点から翻訳教育に活かすことが目的である。

（１）まず原文と翻訳を比較対照し、原文と訳文が同じ意味として対応する箇所を特定し、原文の情報がどのように削除・加工・追加されているかを明らかにした。（２）次に、語・フレーズ・文法・情報の配列という各単位で対応する等価のあり方を、背後にあるイデオロギーも含めて分析した。（３）英語・日本語対照言語学の観点から両言語の特徴を分析し、翻訳等価の実態を明らかにし、翻訳教育へ応用する論稿を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの翻訳研究は言語理論と社会文化理論とが分断されていて、前者は言語学の観点から言語テキスト分析が中心で、後者は社会文化状況のイデオロギー分析が中心だった。ところが本研究は対照言語学・認知言語学・言語人類学という、言語と社会文化を橋渡しする理論を複数導入して翻訳テキストを分析することで、言語と社会文化を包括するイデオロギー研究が可能となった。さらに、それを翻訳教育にどのように応用するかについて、具体的な事例を素材にして提言を行った。

以上により、言語理論・社会文化理論・翻訳理論を橋渡ししつつ、それを教育現場で応用する具体的提言も行い、学術的意義と社会的意義の両面において優れていると自負する。

研究成果の概要（英文）： This research aims at analyzing translation equivalence between English and Japanese (the concept of nearly the same meaning between the original and the translation) from the linguistic perspective, and thus applying it to translation education.

(1) First, I clarified how the original text are manipulated, deleted, or added by identifying the correspondence between the original text and the translation text. (2) Next, I analyzed what are observed as the actual equivalence as in each unit of word, phrase, syntax, and information array including ideology behind the translation manipulation. (3) Lastly, I systematized the real translation equivalence from the contrastive linguistics, and wrote some papers about it application to translation education.

研究分野：翻訳研究

キーワード： 翻訳等価 翻訳シフト 翻訳ストラテジー 翻訳イデオロギー 対照言語学 認知言語学 言語人類学  
翻訳教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

### （1）本格的な翻訳の言語研究の必要性

我々の情報空間には翻訳を介して遣り取りがなされているものが極めて多い。にもかかわらず、翻訳の実態は不透明で不可視なままである。そこで、翻訳によって外国の文章や情報がどのように編集・加工されて伝わっているのかについて、理論的検証を行うことは必須である。

語彙レベルの例であると、『かもめのジョナサン』の1節に“New sights, new thoughts, new questions.”とあるが、五木寛之は「ふしぎな眺めだった。思いもよらぬ考えが心を乱し、あらたな疑問が湧きあがった」と訳している。英語のnewは「新しい」という語義であっても、具体的な文脈のなかで翻訳されることにより実に多様な解釈と、その解釈に基づいた訳出が可能である。また、オバマ大統領の就任演説の冒頭“My fellow citizens,”は、朝日・読売・日経は「市民の皆さん」、毎日・産経は「国民の皆さん」と訳出しており、各紙の世界観を反映していると思われる。このように、翻訳の等価の実態について言語学を土台に多角的に解明することは、グローバル・メディア社会にある今日、喫緊の課題である。特に、英語が世界共通語として使用されている英語の権力性に即し、英語から日本語への翻訳等価の緻密な研究は今まさに必要である。

### （2）言語学の視点からの翻訳研究の必要性

これまで多くの翻訳者が、翻訳の方法論について語ってきた。それらは実務感覚に根差しており、有益なものが多い。しかし、翻訳者は原文と等価に訳していると認識していても、実際には原文と翻訳結果とがズレていることがかなりある。そこで、翻訳者が実際に翻訳したテキストを、翻訳者の直観や翻訳観を頼りに分析するのではなく、主に言語学の知見を応用して客観的に分析し、理論的に体系化することによって、翻訳における訳出技法の実際を明らかにでき、かつ、その成果を翻訳研究という独自の観点から英日対照言語研究にも還元することは翻訳実務家にも必要とされている。さらに、本研究の成果を、体系的な翻訳教育の一つの基軸として活かす方法の提案も、今後ますます翻訳の需要が増える日本社会にとって必要不可欠である。

### （3）翻訳の言語分析の学術的背景

研究代表者は認知言語学を中心にしてこれまで翻訳研究を行ってきた。主に原文と翻訳を比較対照し翻訳のシフト（ズレ）を言語学的に分析する研究である。具体的には、多義語の意味に関するスキーマ理論、スキーマ・ブレンディングによるイディオムの意味論、スキーマ理論を認知文法に応用した語彙文法論（レキシカル・グラマー）や認知言語類型論を応用した英日語の文法構造論、焦点連鎖論をセンテンス内およびセンテンスを超える情報配列の単位に応用して分析する情報構造論である。本研究では、これらを統合・総合する形で、語という小さい単位から、テキストの情報配列という大きな単位にわたって、英日語の翻訳等価の研究を行う。

## 2. 研究の目的

本研究は、英語から日本語への翻訳における原文と日本語の等価（原文と訳文が同じ意味であること）について言語学的に解明し、その成果を英日語対照研究の観点から翻訳教育に活かすことが目的である。

（1）そのために、まず英語の原文とその日本語の翻訳を比較対照し、原文と訳文が同じ意味として対応する箇所を同定し、原文情報の削除・加工・追加などがなされているかを明らかにする。（2）次に、語彙、共起表現、文法、情報配列といった小さな単位から大きな単位へと分析を広げ、各単位で対応する等価のあり方を分析する。（3）英日対照言語研究の観点から英語と日本語の特徴を分析し、翻訳等価の実態を明らかにし、体系化する。以上が研究目的である。

## 3. 研究の方法

具体的研究計画（手順）は以下のとおりである。

（1）翻訳テキストの分析に関しては、研究代表者が既に行ってきた翻訳研究におけるテキスト分析の手法を援用して、認知言語学に依拠して原文と翻訳の翻訳シフトを析出し、英日比較対照分析を体系化する（翻訳等価の言語的側面）。

（2）翻訳者の言説の分析に関しても、研究代表者がこれまで行ってきた認知言語学のメタファー論などを駆使しながら、翻訳者の翻訳に対する考え方や（潜在的な）意識の抽出を行う。

（3）以上から、翻訳テキストに翻訳意識がどのように反映しているかを体系的に論じる（翻訳等価の社会的側面）。

### 【研究の方法・手順】

#### 翻訳シフトの分析

原文と翻訳の両言語間のズレ（翻訳シフト）を多次元的に（語／フレーズ／文法／テキスト構成）分析し、翻訳等価のあり方を解析する。具体的には、認知言語学を土台にしつつ、語彙意味論、フレーズ意味論、文法論、テキスト情報構造論を分析する。

#### 翻訳者の翻訳に対する意識の分析

「翻訳とはXである」「Xとしての翻訳」などの翻訳者の言説を中心に、翻訳をめぐるメタファーを析出したうえで、意識の背後にある根源的なメタファーの分析を行う。

#### 翻訳イデオロギーの分析

によって明らかになった翻訳意識と、 で明らかになった実際の翻訳結果とを突き合わせながら、両者の異同を緻密に検証する。両者のズレとなって現れるのが翻訳イデオロギーである。

国内外の先行研究の分析

国内外の認知言語学を中心とする言語理論と翻訳研究に関する先行研究を集め、 について英日語比較対照研究の観点から翻訳等価の言語的側面を体系化してゆく。また、 の結果から析出された結果を分析し、翻訳等価の社会的側面の解明も行う。

#### 4. 研究成果

最終年度に報告書としてまとめるとともに、国内では日本通訳翻訳学会、日本国際文化学会、日本メディア英語学会、「言語と人間」研究会など関連テーマを扱う学会で発表および講演を行った。

海外では翻訳学・異文化コミュニケーション学・言語学に関連する学会で発表を行った（正確には、2019年4月以降に発表を行った／行う予定である）。

また、成果物である報告書を、関心を示す翻訳実務家や翻訳研究者、メディア論研究者に配布する。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

河原清志「日英語の新聞社説における翻訳シフト」*Human Linguistics Review* vol. 4、2019年、印刷中、査読有

河原清志「国際関係における通訳翻訳の文化構築性と社会的役割」『インターカルチュラル』第15巻、2016年、162-167頁、査読無

河原清志「翻訳シフトと翻訳者の意識／無意識に関する予備的考察」『金城学院大学論集人文科学編』第13巻第1号、2016年、33-46頁、査読無

〔学会発表〕(計11件)

河原清志「翻訳をめぐる役割語（言語学）と役割理論（社会学）の接点」役割語研究会（招待講演）大阪大学、2019年

河原清志、大山貴稔「翻訳語をめぐる憲法学と国際政治学 国権と国益の概念」日本通訳翻訳学会年次大会、2018年

河原清志「翻訳テキスト分析と多層的言語相対論 言語にとって「良さ」とは何かをめぐる言語使用者の意識／無意識」『言語と人間』研究会（招待講演ワークショップ）2018年

河原清志「日本発行の英字新聞の社説における翻訳方略と情報操作性」日本メディア英語学会年次大会、2017年

河原清志・染谷泰正・ジュリエット カーペンター・野口メアリー・リチャード・ドノバン・鍋島弘治朗「シンポジウム『翻訳とは何か』」関西大学英米文学英語学会（招待講演）2017年

河原清志「翻訳としての日本国憲法 人権法・国際法および言語学・翻訳学からの検証」法と言語学会研究例会、2017年

河原清志「同時通訳の訳出単位と訳出方略 オバマ米国元大統領広島演説の放送同時通訳をめぐって」日本通訳翻訳学会年次大会、2017年

河原清志「文学・言語学・言語教育学・キリスト教学の交差領域としての通訳翻訳学」金城学院大学大学院英文学会（招待講演）2016年

河原清志「E. ナイダの翻訳理論イデオロギー：科学主義と福音主義」日本通訳翻訳学会年次大会、2016年

河原清志「倍首相の演説・談話の英日語対訳の等価性と外交戦略」国際文化学会年次大会、2016年

Kiyoshi Kawahara. Constructing and deconstructing representations of East Asia through interpreting and translating remarks by the Prime Minister of Japan. The 2nd East Asian Translation Studies Conference (国際学会) 2016年

〔図書〕(計2件)

河原清志『翻訳等価再考 翻訳の言語・社会・思想』晃洋書房、2017年、全308頁

田中茂範・阿部一（監修）『多文化共生時代の英語教育論』いっぴく書店、2017年、全336頁、河原清志担当箇所「通訳・翻訳活動を活かした英語学習」233-251頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 特になし

## 6．研究組織

(1)研究分担者 以下、特になし。

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 以下、特になし。

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。